

奇跡物語にみる中世の世界観

杉崎 泰一郎

はじめに

クリュニー修道院（当時1200～1500の支院を持つ西欧最大の修道院）の第9代の修道院長ペトルス・ウェネラビリス（Petrus Venerabilis, 尊者ピエールとも呼ばれる、在任1122—56年）は、奇跡物語による修道士教育と俗人の教化を目的として『奇跡について』De Miraculisを執筆した¹⁾。この史料を分析することによってペトルスの世界観と、教化の対象となった中世の人々の世界観を読み取ることができると考えた。また中世の西欧は古代オリエント世界やヘレニズム世界と同じく、奇跡物語が多数成立した文化であり、奇跡物語を分析することによって、奇跡物語を成立させている価値体系や世界観とはどのようなものかについての考察を進めることができると考えた。

ペトルスは『奇跡について』で、同時代に西欧各地で起こったといわれるさまざまな奇跡物語を、2巻61章にわたって各章1話完結で綴っている。ペトルスは奇跡の定義をせず、奇跡がどのように（quomodo）起こるかについても論じていない。彼は物語の語り手に徹し、不思議な出来事を神の意図のしるし（signum）と考え、その教訓的な意味を綴っているのである。収録された物語のなかで多いのは、死者、悪魔、天使、マリア、キリストが出現して善人を讃えたり悪人を罰したりするというような読者の改心を促す内容のものであり、その他にクリュニー修道院の優れた修道士の話（一種の聖人伝）、クリュニー修道院に害をなす者に罰が下る話、秘跡を題材とした奇跡物語（聖体、告解、婚姻）などがある。なお病人の治癒、多産豊穰、失せ物探しの物語はなく、聖遺物が起こした奇跡は1話のみである。ペトルス自身が見たという物語は少なく、多数は伝聞によるものとして語られている。ペトルスはいくつかの物語の末尾で、次のように物語の伝達経路について記している。

「この奇跡を農夫は教区の司祭に順序だてて話し、次に司祭はクレルモン・フェランの司教に話し、この司教が私に話し、私はこれを読者のために文章で伝えようとしたのである」²⁾。(1巻1章)

すなわち奇跡物語の多くは各地で口承伝承として成立し、ついで各地の聖職者が記録し、これをベトルスが教訓物語としてアレンジしてまとめたのが『奇跡について』であると考えられる。なおベトルスが自ら奇跡を起こす物語はない。

1 救済の中心としてのクリュニー修道院

ベトルスは修道院を世界の中心と考え、天と地を媒介して人々を救済する組織と考えていた。これはカロリング期以降、修道士が司祭の叙階を受けるようになり、修道院はミサ、詩篇歌唱、祈禱を行うことで寄進者の現世の幸福と来世の救済を祈る典礼集団になっていた事実を投影している。ベトルスはクリュニー修道士が悪魔と戦う物語を多数収録しているが、1巻7章に臨終を迎えた俗人をクリュニー修道士が悪魔の襲撃から守る物語が記されている。

「(ステファヌス修道士は死に近い)病人に呼ばれた……病人が言うには『獣の鼻をしたこの醜い農夫たちは一体何者だ。群を成して集まってきて、あつと言う間に部屋がいっぱいになりそうなのが見える……この醜い子どもがこの部屋を埋めつくしたのが見えないのか。その容貌は恐ろしく、鼻は長くのびて、細長い顔は身の毛もよだつばかりだ』……(ステファヌス修道士は)聖水がいっぱい入った手桶がちょうどそこにぶらさがっていたので、それを信仰に満ちて取り、中の聖水を確信をもって部屋のあちこちにふりかけるべく四方に撒いた。彼が聖水を撒いていると、病人は力の限りさけび始めた。『よし、がんばれ。よし、攻めろ。敵を追い払ってくれ。あいつらは皆、まるで剣の切っ先から逃げるようにものすごい速さで出ていこうとしているぞ。お互いに邪魔をしているから押しあいへしあいして、後ろの奴は前の奴をひどく押しているぞ』³⁾」

現代人の理性には、このような話しは瀕死の病人が見た幻覚と映るかもしれないが、夢と現実の区別が明確でなかった中世人にとっては有効な教訓になったのであろう。次はクリュニー修道士のミサによって、人間の命が救われたことを知らしめる物語である。

「(グルノーブルで1人の農夫が生き埋めになり)2, 3日が経っても彼が出て

こないで、妻は彼が死んだものと思ひ込み、靈的な奉納によって夫の魂を救う勤めを始めた。すなわち1年の間、7日ごとに夫のためにミサを司祭たちにあげてもらい、夫のためにパンと蠟燭を奉納し、教会の習慣に従い救いの秘跡によって死んだと思った夫の魂を助けようと努力した……（1年後に農夫は救出され）『私が入ってきた穴が、君たちのとりさった土で塞がれ、私はごらんのような小さな空間に閉じ込められた。何日もの間、食べ物も光もなく過ごした。衰弱しているところへ突然1人の人（天使）がパンと光をもって現れ、私を励まし、食料をわたし、持ってきた蠟燭で明るくこの空間を照らしてくれた。そのパンでいたい7日から8日位かかって私は元気になり、毎日蠟燭で照らされて、飢えの危機と闇から救われた』⁴⁾。（2巻2章）

優れたクリュニーの修道院長の遺体（聖遺物）が奇跡を起こす物語も記されている。中世の教会はそれぞれ守護聖人の遺体を保有し、特に有名な聖人の墓を有する教会には多くの巡礼が訪れた。ペトルスは第4代クリュニー修道院長マイオルス（Maiolus、在任965—94年）の遺体が奇跡を起こした物語を記している。

「この聖人（マイオルス）はその生涯と奇跡によって偉大な人で、ガリアのすべての人が彼のことを知っている。彼は存命中からたいへんに優れた人物とされていたし、死んだ後は生前よりも評価が高まったのである。162年の間すなわち彼が死んだあとの期間、彼は奇跡の恩寵によって広く知られるところとなった。彼は聖母の名によって、われらのヨーロッパのどの聖人も比較にならないほどの奇跡を起こしたのである……

（ある母親が子の亡骸を携えてマイオルスの墓に詣で）女は聖人の墓に子供の亡骸とともに到着し、亡骸を信仰に満ちて祭壇の前に置いた。見物している者は、心踊らせて待ち望んだ……子供は第1時に祭壇の前に置かれ、ずっと死んだままであったが、第9時になって目を開け、子供らしい弱々しい声で母親を呼んだ』⁵⁾。（2巻32章）

クリュニー修道院で起こったとされる秘跡を主題とした物語も数話収録されている。ペトルスの活動した時期（12世紀前半から中葉）は、秘跡の理論が確立しつつある時期であり、ペトルスは正統的な秘跡の教義を奇跡物語によって伝えようとしたのであろう。次の物語は聖体の実体変化を教える話しの1つである。

「彼（クリュニー修道士ゲラルドゥス Gerardus、没1133年）は祭壇における救

済の秘跡を愛することを、あらゆる美德の中心に据えていた……秘跡の外見は彼の知性に覆いを投げかけることなく、彼は霊的な感覚で、主が路を使徒たちと共に歩み、処女マリアを傍らに十字架にかかり、死者のうちから復活してマグダラのマリアと共にいるのを見た……ミサはすすんで聖変化となり、ゲラルドゥスはパンと葡萄酒の実体がキリストの体と血の実体へと変化する神の言葉を唱えた。主の祈りを唱える前に、ふと彼は目を聖なるものに向けた。すると見よ、語りながら私は呆然とするのだが、彼には祭壇の上にパンの姿は見えず、その代わりに小さな子供が手と足をいたいけな仕種で動かしているのが見えた……」⁶⁾。(1巻8章)

また正しい告解と偽りの告解の例を示す物語も数例ある。告解が秘跡として義務づけられるのは、ベトルスの没後半世紀を経た1215年の第4ラテラノ公会議であったが、次のようにベトルスは臨終に際して司祭に個人的に罪を告白し、許しを得て救われる物語を記している。

「(大きな罪を隠して告解した病人に) 司祭は聖体を与えた。聖体を受けたとたんに飲み込む力が病人から失せた……あらんかぎりの力で飲み込もうとしたが何度も試みて無駄であるとわかり、飲み込めずに苦しくなって、聖体を寝ている寝台の脇に吐き出した。病人はこの出来事を大いに恐れ、すでに去った司祭に戻ってくるように願った。司祭は戻ってきた。病人を見て、呼び出したのは何故かと尋ねた。病人は神の霊の働きによって悔い改め、自分が悪行をなしたこと、神の前で嘘をついたこと、さきほど否認したこと(人妻との不倫)が事実であったことを打ち明けた。司祭は病人が大いなる悲嘆のうちに悔い改めを行い、罪を償っているとき、苦しみながら告解したこの者に同情し、許しの儀式を行い、改めて主の聖体で力づけた。病人は聖体を拝領すると実に楽に飲み込んだ」⁷⁾。(1巻3章)

2 修道院の敵、迷信、異教を攻撃

クリュニー修道院をキリスト教世界の中心に据えるベトルスは、これに敵対する者を厳しく断罪する物語を記している。クリュニー修道院に対して実際に危害を加える俗人たち、特に領主に対しては厳しい態度で臨んでいる。例えばクリュニー近郊のマーコン伯ギョームを実名で登場させ、これを断罪した物語がある

「(2巻の)最初に、悪しき領主たちを恐れさせ、改心させるために、マーコンで起こった話を語らねばなるまい。ある時期この町を治めていた領主は、伯の名のもとで教会の人々や財産に対して忌まわしい暴虐な行為を働いていた (Guillaume de Macon, 在位 1106-26 年) ……」

ある祝日に、伯はマーコンの館の玉座に座していた。多くの騎士やさまざまな身分の人々が彼を囲んでいた。突然見たこともない1人の騎士が館の門を通って中に入り、見ている者皆の驚く前で、馬に乗ったまま伯の前へと進み出た。騎士は伯の前で立ち止まり、伯に話をしたいと言った。そして伯に立ち上がってついてくるようにと、願うというよりは命じた。伯は見えざる力に縛られて抗うことができず、立ち上がって城門まで進み出た。そこに1頭の馬が用意されていて、伯は騎士に促されて鞍に跨がった。彼が手綱をとるやいなや、皆の見ている前で、目が眩むほどの速さで空に連れ去られてしまった。この光景を見て駆けつけた者はみな仰天し、伯が空を舞って行くのを見て、見える限りその姿を目で追ったのであった⁸⁾。(2巻1章)

ここに記されているマーコン伯ギョームは、1126年に暗殺された人物であった。ペトルスは伯の突然の死を天罰として描き、物語を通して修道院に危害を加える領主階級を恫喝しているのである。なお悪魔が罪人を天高く連れ去るという展開は、中世の奇跡物語には数多く見られるもので、来世が山の頂にあるとしたゲルマン人やケルト人の伝承の名残りとも考えられる。なおこの物語には次のような後日譚があり、ペトルスの領主階級に対する執拗なまでの警告が読み取れる。

「町の人々はこの事件を恐れ、記憶を子孫たちに伝えようとしてこの門を石で塞いでしまった。最近になってギョーム伯の家令のオジェ (Otger) がこの門を新しくして、皆が通れるようにしようとした。ある日たくさんの職人を雇い入れ、門を塞いでいる石を取り除いた。彼自身もかなり教会を迫害した人物で、さまざまな口実のもとに教会の財産を略奪していた。石をどける作業をしている最中に、彼は見えざる悪魔によって持ち上げられ、居合わせた者みなが見ている前で空高く運ばれたかと思うと、墜落して体は強く打ちつけられ、衝撃で彼の胸は裂けてしまった⁹⁾。

このほかにペトルスは多産、豊穡を願う素朴な呪術行為を、クリュニー修道院のみならず教会に背くものとして断罪している。1巻1章は聖体を使って呪術行為を行っ

た農夫をめぐる物語である。

「オーヴェルニュに1人の農夫が住んでいた。彼は蜜蜂の巣箱を持っていて、その中で蜜蜂の群れが甘い蜜を作っていた。農夫は蜜蜂が飛び出したり、死んだり、不慮の事故でいなくなってしまうのを恐れて、悪しき魔術師たちの助言に従った。この者たちは悪魔の業によって、神の恩寵をも使って魔術を行い、語りがたいことながらも神の秘跡でさえ魔術のために濫用していたのである。さて農夫は教会に赴き、キリスト教徒の慣習に従って司祭から聖体を拝領したが、飲み込まずに口の中に含んだままにしておき、魔術師に教えられたとおりの前述の蜜蜂を飼っている巣箱の1つに行き、その穴に口をつけて吹きつけはじめた。口の中に含んだ聖体を巣箱に飼っている蜜蜂に吹きつければ、蜜蜂はけっして死なず、逃げたり、いなくなったりすることもなく、蜜蜂はみな無事で、それまで以上の利益をもたらす、と魔術師は農夫に言ったのである」¹⁰。

このあと蜜蜂たちは聖体をうやうやしく礼拝し、聖体は嬰兒の姿になる。恐れおののいた農夫は嬰兒を抱きかかえて教会へ向かうが嬰兒は突然消える。しばらくするとこの村には住む人がいなくなり、荒れ果ててしまったという結末となっている。中世において蜜蜂はしばしば純潔のアレゴリーとして用いられていた。ペトルスも蜜蜂を、聖体を冒瀆する貪欲な農夫とは対照的に神を敬うものとして描いている。村全体が罰を受けたという結末は、村全体が呪術を行っていたという意味か、連体責任という意味であろう。

また奇跡物語ではないが、ペトルスはユダヤ人から金を借りることを禁じている。

「彼（クリュニー修道士マタエウス Mathaeus d'Albano, 没 1135 年）はサン・マルタン・デ・ジャン修道院（クリュニーの支院）の院長職になってほどなく、修道士たちは何よりも先に修道院の負債について彼に報告をした。債権者について尋ねたところ、そのなかの何人かはユダヤ人であることがわかった。彼は報告をした修道士たちに向かっていった。『あなたたち、キリスト教徒である修道士は、背信者のユダヤ人たちから金を借りているとはどういうことか。キリストとベリアルの間にはどのような調和があるのか。光と闇の間に、信仰と不信仰の間にどのような繋がりがあるのか。ユダヤ人のところに行って、負債を払うことで非難されるべき関係を即刻断ち切り、今後は何かを授受したり、貸し借りをしたり、そのほかいかなる状況であろうともユダヤ人と関わることをしないように注意しな

さい』¹¹⁾。(2巻15章)

十字軍の時代に生きたペトルスは、コーランをはじめとするイスラム書物の翻訳を推奨し、異教徒や異教の学問に対して寛大な姿勢を示したことで知られている。一方で、イスラム教徒やユダヤ教徒に対する論駁書を執筆し、十字軍を鼓舞するという側面もあった。ここで彼は異教を敵対者とみなす一面をのぞかせている。

3 読者を説得するレトリック

ペトルスは読者や聴衆を物語にひきつけるための工夫をこらしている。多くの物語に実在の人物を実名で登場させ、時としてペトルス自身が現れる。物語の舞台となるのはクリュニー修道院とその近郊が多いが、西欧各地のクリュニーの支院を舞台とするものも多く、スペイン、フランス、スイス、イタリアのさまざまな場所の物語をその土地のプロフィールとともに語り、読者の注意を喚起するように仕上げていく。例えば1巻28章のイスパニアの話では、ペトルスは物語を始める前に入念な前置きを語っている。

「われわれがイスパニアを訪れたときに見聞したことである。イスパニアに防備を固めた名高い町がある。立地が良く、豊かな土地に囲まれ、住民も多く、ほかの町を凌いでいた。その町がステラ (Stella) という名であったのは不適當ではないと思う。この町にブルゴス (Burgos) 出身でペトルス・エンゲルベルトゥス (Petrus Engelbertus) という名の人が住んでいた……晩年になって彼は……俗世を捨て、クリュニーの修道規則に従いクリュニーに従属するナヘラ (Najera) 修道院で修道服を着た……私は (イスパニアを訪れた際に) この重大な幻視の話をつづった人物がどこにいるかを聞き、彼はナヘラ修道院に所属する近くの隠遁地に住んでいることを知った。案内人に従ってそこまで行き、彼に会った。彼は成熟した年齢に達し、態度は重々しく、証拠を示しながら話し、雪のように白い髪をしていたことから、十分な信頼をおくことができた……そして、われわれに隠されていたものの覆いを解く前に彼は行った。『あなたたちが私に尋ねていることは、他の誰から聞いたものでもなく、すべて私自身が自分の目で見たものである』。これを聞いて、他の人の言葉を語るのではなく、彼自身が見たことが語られるのを皆喜んだ。そこで皆はますます彼にいろいろ尋ねようとする気持ちに駆られ、聞きたくて聞きたくてたまらなくなり、それ以上待ちきれなくなって、彼

が見たことを語るように促した。なお、私は彼が話したそのままをここに記す。それはこの話を読んだり聞いたりする人が、言葉の感覚を掴むだけではなく、彼の口から出た言葉を聞いたのと同じ印象を持つようにするためである」¹²⁾。(1巻 28章)

ペトルスは奇跡を世の終わりの兆候として解釈することはなく、むしろ日常の出来事における神の意思のあらわれと考え、これを解釈して伝えることを修道士としての自らの使命とみなしているのである。

結びと展望

ペトルスの物語の多くは、驚くべき出来事に神の意思を読み取り、これを説明することで個々に改心と悔い改めを促し、救いに導こうとするものであった。そしてペトルスは救済におけるクリュニー修道院の役割を強調し、修道院に寄進する者が救われ、危害を加える者に罰が下る物語を記した。これは中世の奇跡集の定型であるが、ペトルスは救済の対象を特定の地域や階層、特定の聖人のとりなしに限定せず、奇跡で救済されるためには個々人の信仰が前提であるとし、修道院の枠に限定されない秘跡の効能を説明している。この意味でペトルスの物語は、修道院を救済の中心に据える中世前期の価値体系と、「煉獄の誕生」、告解の制度化・義務化、個人の誕生に示される12世紀の価値体系とを整合させようとしたものと言える。

またペトルスの物語を通して、ペトルスが教化の対象とした俗人の世界観を知ることができる。俗人たちは奇跡によって救われることを期待し、呪術的行為によって多産・豊稔を願い、修道院の財産や権益を犯していた。ペトルスは俗人のなかの根強い奇跡願望や奇跡への恐れを利用して、俗人を教化し、場合によって恫喝するために奇跡物語を執筆したのである。『奇跡について』は読まれただけでなく説教の種本として流布し、西欧各地に90近い写本が現存している。

奇跡を願い、信じる慣行はすでに古代地中海世界にみられ、特に治癒神に対する巡礼がさかんに行われていた。また旧約聖書において驚異的な出来事や、新約聖書においてイエスや使徒の奇跡などが記された。古代から中世にかけて行われた修道院の説教において、奇跡物語は神の意思や力の「しるし」を解釈する教訓として、信仰を強めるために使われていた。アウグスティヌスは奇跡物語が聴衆の教育のために役立つものであると述べ¹³⁾、グレゴリウス大教皇は「聞く者の心は言葉よりも教訓逸話

(exempla) によって神と隣人の愛へかき立てられる」と述べている¹⁴⁾。ペトルスはこの伝統に立脚して『奇跡について』を執筆し、12世紀末からシトー会修道士、托鉢修道士によって書かれた教訓逸話集への橋渡しをしたのである。

一方でスコラ学的发展にもない、不思議な出来事に神の意思を読み取ってきた修道院神学とは別に、奇跡を因果関係から定義する動きが強まった。トマス・アクイナスは、奇跡とは神が自然の秩序を外れて起こすもので、その因が万人に隠されている出来事であると定義した¹⁵⁾。すなわち日食などの不思議な出来事でも、その因果関係が理性によって究明されれば奇跡とはみなされなくなり、奇跡とみなされる出来事はきわめて限定されることとなった。

注

- 1) Edition par D. Bouthillier, *Petri Cluniacensis Abbatis, De Miraculis libri duo, Coupus Christianorum Continuatio Mediaevalis*, 83 (1988). 杉崎泰一郎訳『奇跡について』上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 7』平凡社、1996年、666-699頁は1巻序から9巻までの部分訳である。研究としては、J.-P. Torell et D. Bouthillier, *Pierre le Vénérable et sa vision du monde, sa vie - son œuvre*, Leuven, 1986; 杉崎泰一郎『12世紀の修道院と社会』原書房、1999年、21-125頁など。
- 2) *De Miraculis*, p. 8
- 3) *Ibid.*, p. 23.
- 4) *Ibid.*, pp. 100-101.
- 5) *Ibid.*, pp. 161-163.
- 6) *Ibid.*, pp. 28.
- 7) *Ibid.*, pp. 12-13.
- 8) *Ibid.*, pp. 97-99.
- 9) *Ibid.*, p. 99.
- 10) *Ibid.*, p. 7.
- 11) *Ibid.*, pp. 125-126.
- 12) *Ibid.*, pp. 87-88.
- 13) *De Civitate Dei*, t. 22. cap. 9
- 14) *Homiliae in Hiezechielem prophetam* II, cap. 7.
- 15) *Summa Theologiae*, pars. 1, qu. 105, art. 7.